



47

同窓会創立40周年記念

上智大学新聞学科 同窓会会報

発行 上智大学新聞学科同窓会
〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町
7-1 新聞学科事務室
TEL (03) 3238-3631
FAX (03) 3238-3094
編集 新聞学科同窓会広報委員会
編集責任者 宮内剛男
t-miyauchi@mwa.biglobe.ne.jp

一九七〇(昭和45)年に読売新聞社から上智大学へうつられて以来新聞学科で三十二年間ジャーナリズムを教えられた武市英雄教授(64歳)が三月をもって退任されることになった。

「ニュースの変遷をたどって」と題された最終講義は一月十七日、多くの在校生、卒業生が集まるなか図書館九階にて行われ、夕刻には感謝の会が催された。

以下は、鈴木雄雅教授の研究室が発行した三年生ゼミニュースからの抜粋である。

第二の人生

最初に受け持ったのは、「時事問題研究」(二年必修、当時)や「時事問題研究特殊(国内)」「三年選択(同)」など。新聞記者の経験を生かし、現場に近い感覚で授業を行っていた。

当時の武市先生は三十三歳、一番の若手だった。学生たちに対しても、兄弟のような感覚を持っていたそうだ。

それがいつのまにか、子供のように感じるようになっていた。大学教授は「いつも同じ年齢を相手にしているから、自分が年をとったことに気がつかない不思議な仕事だ」という。

そんな学生たちも、気付けば男女比が逆転し、授業マナーは悪くなり、ずいぶん様変わりした。「でもマ

ナーは悪いけど、頭は良くなっていると思っただよね」と苦笑する。

それを痛感したのは、授業中に一番騒がしい生徒に英文要約の宿題を出した時だ。生徒から「サマリー」というあだ名で呼ばれるほど、たびたび宿題を課したが、提出される要約はどれもなかなかのもの。叱るに叱れなくなったそうだ。

大学教授になって、アメリカだけでなくアジアにも関心を広げることが出来た。新聞記者はいろんな経験

新聞学科で三十二年

「コミュニケーションの本質は愛、をとかれた

武市英雄教授「退任

」



が出来ることが、広く浅くで専門家にはなり得ない。比べてこの仕事は、ひとつのテーマに継続して取り組むことが出来る。「記者と大学教授、両方経験できて幸せ。知識と経験の両方から話が出るから」。

第三の人生

四月からは大妻女子大学文学部に開講する、「コミュニケーション文化学科」で教鞭をとる。ただ先生の第三の人生は、そのまた先にあるようだ。子供の頃からの憧れである、パイオ

リストになること。「君たちが社会人として独り立ちするころ、どこかのキャバレーでジャズでも弾いて、『あれ武市先生じゃない?』なんて言われたいね」と、楽しそうに話してくれた。名器と呼ばれるパイオリンの音色の違いを熱く語る姿は、先生ではなく、一人のパイオリニストの顔になっていた。

先生からのメッセージ
「日本という国益から離れて、地球市民という感覚を持つてほしい」。

武市先生との思い出

文学部S教授がまだ大学生だった頃の武市英雄講師(当時)と、いまの先生はお変わりがない。いつもやさしく話を聞いてくださる。それにどれだけ助けられたか。

S教授が最近出した本のあとがきにこうある。「S教授が学生時代からお世話になった先生方も次第に大形無形の教えがいかに深く、厳しかったか。またそれに自分は何だけ応えられているのだろうか。それはS教授が語る大学教育観に多くの影響を与えてくれた。

手元にてきたばかりの新聞学科同窓会会報の二十年近い合本がある。その第十七号(平成三年三月)に武市先生が「コミュニケーションの本質は愛 ソフィア・ジャーナリズム精神」という巻頭言を書かれている。他者へのいたわりをもってジャーナリズム活動を行うことが根源になければならないと説き、人間の痛みが分かるジャーナリストの輩出を上智の卒業生に期待している。

われわれは、それに応えることではじめて先生の教えの深さを学び取ることができるのではないだろうか。

(鈴木雄雅教授)

同窓会創立40周年記念

いまだにそれは本当のことであつたのかと信じられない。ひよっとして夢であつたのかとさえ思う。

一九九二年の春のことだつた。私は新任の教師として新聞学科に着任し、四月の半ばに初めての学科教授会に出席した。慣れぬ事として私が緊張していたその教授会で、武市先生はデベラ先生と論争となり、大爆発されたのである。あたりに響き渡る大声で、「デベラ先生、それはおかしいよ」と詰め寄る武市先生の迫力といったそれはもう……。私はすごいところに来たものだと内心どきどきしていた。それまで、学会等で武市

先生のごことは存じ上げていた。その先生のイメージとはまるでちがうという印象であつた。

あれから十年が経つ

た。その間、武市先生はいつも穏やかな笑みを絶やさず、ちよつとアルコールが入ればカラオケで一曲また一曲と楽しめる温厚な先生であり続けておられる。ではあのときの先生の大爆発はなんだつたのだらう。

今私はひとつの仮説を持っている。



ひよっとして先生は周期的に爆発なされるのかも知れない。東海大地震のように。だとすると、次の大爆発が近づいているのかも知れない。でもそれは、先生がエネルギーを溜め込まれた結果なのだろうと思う。だとしたら……先生のエネルギー……。次の爆発が楽しみなような気もする。(石川旺教授・学科長)

……
武市英雄先生の名前を知つたのは米留学中に日本についての研究論文を書いていいたとき、指導教授であるアン・クーパー先生から参考文献についての指導を受けた時だつた。その当時は日米ニュースの比較研究について論文を執筆しており、武市先生に加えて、石川旺先生の研究も引用していたと思う。一九九六年のことだつた。それから二年後、論文執筆で研究内容にしか触れなかつた武市先生と同じ学科に職を得ることになり、とてもうれしく思ったものだ。

武市先生は時間が許す限り米国の学会に顔をだされる。特に「米国のジャーナリズムとマスコミ教育学会」では武市先生の名前を知っている研究者が多く、先生を頼つて来日し、日本のメディアについて多様な視点からリサーチをし、大きな成果をあげた例も多いと聞く。

先生はミネソタ大学、ミズーリ大学、アイオワ大学ではサバティカル期間中

に内容の濃い研究の時間をもちた。在外で研究することの大変さを知っておられるからであるが、先生は来日した研究者たちに身銭をきって宿泊施設などの世話されていることを知った。ともすればひとりよがりになりがちな研究者とは違い、先生は度量の広い方だ、と感じたものである。

上智に職を得て以来、私も先生にならつて毎年出来る限り米国学会の審査論文に挑戦し、通過すれば渡米することになっている。武市先生が示された学究の道筋を牛歩のようではあるが、少しずつでもたどらせていただき、米国と日本のマス・コミュニケーション研究界をつなぐ存在になれるよう努力したいと思つている。

武市先生はすでに身をもって私の手本を示してくださつたと感謝している。(金山勉助教授)

たけいち・ひでお 一九三七年東京生まれ。上智大学文学部英文学科を卒業後、読売新聞社に入社。金沢支局、内信部にて勤務。本学では八三年『ソフィア』編集長、八六年学事部長、九七年大学院文学研究科委員長、二〇〇〇年社会正義研究所所長などを歴任。九一年日本時事英語学会会長、九九年第十一代日本マス・コミュニケーション学会会長。

専攻は国際コミュニケーション、米

国ジャーナリズム史で、授業では二年次の必修科目「国際コミュニケーション論」のほか、「新聞論」や「外国ジャーナリズム」、大学院では「米州のマス・メディア論特講」などを担当されていた。主要著作は、『日米新聞史話』(福武書店、一九八四年)、『マス・コミュニケーション概論』(日本評論社、一九八七年)、『ゼミナール 日本マス・メディア』(日本評論社、一九九八年)など。

武市先生、インタビューに協力していただき、ありがとうございました。インタビューに関しては、ゼミ生行方不明事件やカラオケ定番はエルビスなど、書ききれなかつたおもしろエピソードも多くて残念です(おそろくこっちのほうがタブロイド的でみんな知りたいだらうと)。何にせよ、このような機会を持つことができたことに感謝します。

私自身は国際コミュニケーション論新聞論の授業でお世話になったのだが、武市先生といつて思ひだすのがその独特の語り口から語られるご自身の体験談だ。また、どこかに旅行された際には必ずといっていいほどその土地の新聞を持ち帰り、授業で紹介されていたことも印象に残っている。

最後になりますが、先生の次のフィールドでの更なるご活躍を心よりお祈りいたしております。(大原・鴨井)

同窓会創立40周年記念

学長選挙 カリー氏再当選

二〇〇二年三月三十一日をもって、ウィリアム・カリー学長が任期満了を迎える。それに伴い、昨年十二月十二日に次期学長選挙が行われた。投票権を有するのは「選挙の当日に本学に在籍し、かつ、選挙人名簿作成の日において勤続期間が六か月以上」の教職員七百六十五人であった。

学長選挙選考委員会によって選定された候補者は三人で、現学長のウィリアム・カリー氏、外国語学部アジア文化研究室教授の石澤良昭氏、理工学部生命科学研究所教授の青木清氏の各氏即日開票の結果、有効投票数のうちの過半数二百七十五票を得た候補者がいなかったため、十二月十九日に決選投票が行われることが決定した。

決選投票の候補者として残ったのは得票数が多かった上位二人のカリー氏と青木氏。投票総数は五百五十六票、うち有効投票数は五百四十九票、無効票は七票であった。各氏の得票数は、カリー氏が二百六十票、青木氏が百四十五票、石澤氏が百四十四票。

十九日の決選投票では、開票の結果カリー氏が二百五十六票、青木氏が二百八票を得票し、カリー氏が当選人に決定した。新学長の任期は二〇〇二年四月一日から二〇〇五年三月三十一日までの三年間となっている。決選投票

会報3 45号の合本を刊行

新聞学科同窓会は二〇〇一年(平成十三年)創立四十周年を迎えました。三十周年時に記念誌『ソフィアの鷲とともに』を発行しましたが、今回は「同窓会会報」を幻の第一号から四十五号



までを復刻刊行しました。二〇〇一年度の運営会員には既にお送りしました。

また一部三千円(運営会費に充当)でも有料頒布いたします。ご希望の同級生の方などに広く告知をお願いいたします。問い合わせは同窓会事務局まで。

郵便振替「上智大学新聞学科同窓会」
0010007906001

新任教員の紹介

橋場義之(はしば・よしゆき)教授
毎日新聞(東京本社メディア面編集長)出身。四月から「時事問題研究」新聞論「編集論」、大学院などを担当する予定。

における投票総数は四百七十二票、そのうち有効投票数は四百六十四票、無効投票数は八票だった。

新聞学科・学科同窓会史

(一九九二～二〇〇二年)

一九九二(平成4)年「同窓会二十周年誌『ソフィアの鷲とともに』」刊行
石川旺教授着任

一九九四(平成6)年「ホセ・デベラ教授退任、名誉教授に。音好宏講師着任

一九九五(平成7)年「三好崇一教授退任、藤田博司教授着任 大谷啓治文学部教授、第十一代学長に就任

一九九七(平成9)年「同窓会第五回『卒業生名簿』発行 武市教授、文学部研究科委員長に就任 大学・法学部に環境法学科を増設

一九九八(平成10)年「春原昭彦教授退任、名誉教授に。金山勉講師着任 一九九九(平成11)年「渡辺薫教授退任、田島泰彦教授着任。武市教授、日本マス・コミュニケーション学会第十一代会長に就任 第十二代学長にウィリアム・カリー教授が就任 二〇〇〇(平成12)年「植田康夫教授 日本出版学会会長に、武市教授、大学・社会正義研究所所長に就任 二〇〇一年(平成13)年「大学院設置三十周年 同窓会四十周年記念『同窓会会報』(3 45号合本)を発行 二〇〇二(平成14)年「武市英雄教授退任、名誉教授に

〔新聞学科卒業生数〕2002年3月現在

卒年	卒業人数
1935 - 44 昭和10～19年	158人
1945 - 54 20～29年	190人
1955 - 64 30～39年	414人
1965 - 74 40～49年	462人
1975 - 84 50～59年	594人
1985 - 94 60～平成6年	680人
1995 - 2002 平成7～14年	514人
合計	3,012人

専門部 (昭和10 - 昭和25) 304人
学 科 (昭和26 - 平成14) 2,708人

〔大学院修了者数〕

前期課程(1974～2001年) 184人

後期課程(1979～2001年) 40人

博士課程修了者 6人

URL

<http://infowww.cc.sophia.ac.jp/sophiaj/jalumni/>

<http://infowww.cc.sophia.ac.jp/sophiaj/jalumni/alumniplink.htm> [卒業生のHPリンク]

<http://infowww.cc.sophia.ac.jp/sophiaj/> [学科公式]

同窓会創立40周年記念

私の学んだこと

村中 誠(昭和31年卒)



私の入学した頃は、新しく完成したばかりの図書館と赤煉瓦の一号館があり、あと蒲鉾型の寄宿舎と木造の食堂があった。寄宿舎は米軍の払い下げ、木造のほうは日本陸軍の兵舎然としたもの。そのいずれも今はない。食堂は火事で焼失したと聞く。

今残っている一号館の赤煉瓦の建物は、先輩に聞くと竣工時には学長自ら建物の一角をハンマーで打ち壊して、工事が手抜きなしで行われたかを嚴重にチェックされたという伝説が残っている。これこそイエズス会の布教および教育に対するアプローチの仕方だったのだろう。

教室または合同大教室の講義中、後ろで私語しているのを見つげられるとその学生は怒鳴られ、首根っこを掴まえられて室外に放り出されることもあった。修道院長などをされたことのあるヘルツォーク神父などはその例。

私も教室から廊下に入り出した時、フリーリン系の神父(英語担当)にぶつかって Watch where you go.....

と、コッピドク怒鳴られたことがある。ナントうるさい大学だなどと思ったりしたが、考えてみると、これくらい厳しいやり方が教育の現場では、必要不可欠。現在、小、中、高校のあるところでは、教室崩壊の憂いを聞くが、厳しいスバルタ教育は、PTAのトラブルをかわしながらも、ある程度いいのではないだろうか。

さあ、教わった先生がたを思いだしてみよう。

イグナチオ教会の主任司祭や学長の経験のあるホイベルス神父には、宗教学を学んだ。この人はご存知のように「細川ガラシア夫人」戯曲の著者でもあるが、優しいお父さんのようで、私は時々居眠りしながら、神の存在の証明とか、存在論、三身一体説など、良く分からなかったが、師の魅力に惹かれて、クラスをサボッタことはない。

また先輩の話によると、戦時には宮城前の勤労奉仕にゲートルを巻いて学生と一緒に出かけ、修学旅行では、旅館で膝上の短い浴衣で学生たちと楽しんでたそう。またフルート演奏もたくさんあったという。

さて、他に私の心を惹いた中味のある講義は、エルリンハーゲン神父の哲学・倫理学講座である。彼は西ドイツのある財閥の出であるが、著ることなく、非常に学究的面があり、外国・日本のあらゆる文献をタマには持参し

て、哲学とは面白いものだナという感覚を受講者にもたせた名講義であったといつても過言ではない。例えば自殺論、一つにしても、カトリックの立場からだけでなく、あらゆる立場から、その是非を講義でみごとに展開していたなど思い出す。

フランチ・ボツシュ、なんて呼び捨てにしたら、ボツシュ神父にまた怒られそう。学生たちからは「白い江戸っ子」と云われ、日本人より漢字を多く知っているのではないかということが、彼の講義で良く分かった。四十代の若さで亡くなったのは、イエズス会にとつては、宝の喪失だった。

新聞学科の先生方



英語は、川中

康弘先生とトレシー神父に教わり、川中先生は米国留学帰りの直後でもあり、

得意のシユラムのマスコミ論が本目だが、余力で実践英語のクラスも担当、特にジャーナリスティックな、やさしいボキャブラリーを駆使して、読みやすく文節を短くして纏める、このやり方は、マスコミ界に入れなくて、日本コカ・コーラで三十年ほど、マーケティング業務に携わった時の英文作法に役立つ。会話でも Plain talking が彼のモットーだった。

トレシー神父も魅力的なテキストによる英語、とくに詩が出てくる箇所があると、なんでもリビートして暗唱させられた。例えば、「片岡に露みちえ……」上田敏訳で有名なフローンニグの Pippa Pass song など。トレシー神父は、その後ソウルの修道院長となつて韓国に赴任なさったそうだが、会いたい先生の一人である。

ドイツ語は、宇田五郎先生に習った。私はよく先生から注意を受けた学生だった。当時貧しかったので、苦学生の私は、昼間は上智で学び、午後三時過ぎからは米極東空軍基地に勤務し卒業まで続けたから、アメリカ軍人との接触で、どうしても米語調、ツイ発音も歯切れの良いドイツ語になっていなかった。「お前さんのドイツ語の発音は米語の影響を悪く受けて歯切れが悪い」と、修正に努力したが、なかなか治らなかつた。

カップ・ブックスで有名になった「面接」の堀川直義先生も忘れられないキャラクターの一人。私はコカ・コーラに入る前の六年間は、就職難でマスコミ関係には、どこも縁がなく、業界紙関係をわたり歩いた。

取材では堀川先生の対話の理論が実践できた。対話のとき、相手側に話のレポート(調帯)を掛けて human interface をインサートしながら言葉のキャッチボールをやれば、全体の滑車とし

同窓会創立40周年記念

ての対話は進み取材は自然に成功する。一番大事な小野秀雄・新聞科長を忘れてはならない。上智大学に新聞科を創設した人であり、新聞学 (Newsing) (epub) という学問のカテゴリーを確立した生みの親である。最初は専門部からスタートしたが、ともあれ上智大学は日本で初の新聞学科を持ったのである。東京大学新聞研究所、日本新聞協会と深く関わりを持った。小野教授のニュースとは「現在接近」にあったが、新聞に加えて、ラジオ、TVとマス・メディアが加わった現在は、現在接近という面では「新聞は、ラジオ、TVで先行されたニュースを確認するマス媒体」でしかなくなっている。

友人にはいつぶう毛色の変わった梅原雄二郎君がいた。

彼は入学当時から既にUPI写真通信社のカメラマンであり、事件があるトスビグラを抱えて現場に急行し、有名な国際ボクシング大会があると、必ずリンク・サイドで、スビグラを構えていた。たまに教室で会うと、彼は英字紙『ジャパン・タイムズ』を小脇にかかえており、私も気取って同じ新聞を持っていたので、当時流行のクロスワード・パズルを、お互い意見を交わし競いながら仕上げた記憶があり、これは英単語パワーを伸ばすのに大いに貢献した。

少し饒舌に思い出を語っていたら、

原稿が長くなってしまったので、ここで「麗しのアルママール ソフィア……」を口ずさみながら筆をおくことにしよう。

日本一周自転車旅行に挑戦

安藤守人(昭和41年卒)



大学時代の思い出は、たくさんある。思えば、

その後の三

十六年の新聞社暮らしの原点は、上智のキャンパスにあったのかも知れない。

二年生から三年生に進級する昭和三十九年の冬から春にかけて、親友と二人で「日本一周自転車旅行」を敢行した。当時も今も旅行といえば「海外」があこがれナンバーワンだが、貧乏学生ゆえに先立つお金がない。

そこで自転車に TENT を積んで、自分の足をエネルギーに日本を見て回ろうというアイデアは、当時ベストセラ―になった小田実さんの『何でも見てやろう』にヒントを得たもの。

ところが肝心の自転車がない。お金もない。すると、親友の父親の友人がサイクリング車を提供してくれるという。さらに、この計画がある新聞に掲載されたところ、見ず知らずの大手製薬会社の会長さんが「応援してあげよ

う」と資金を出してくれた。かくして二人は二月上旬、紀尾井町のキャンパスを勇躍出発できたのでした。さらに、この自転車旅行の同時進行レポートを週一回、その新聞がコラム連載してくれるということになった。

何が起きるか、何に出くわすか、何に感動するか、それをどう書き、どう本社に原稿を送るかが問われたわけです。日本列島を時計回りに走りながらの送稿は、知らず知らずのうちに記者修業になったと思う。

入社したのは、その新聞社ではなく、毎日新聞。第一赴任地は長崎県佐世保市だった。自転車旅行では通過しなかった土地だが、日本一周の続きと考えれば気楽なもの。原子力潜水艦入港問題や、エンタープライズ闘争の現場でもあった。知らない土地に足をつけ、知らないことに遭遇する。日本一周と新聞記者になれたことは無縁ではなかったようだ。

その後、福岡勤務、サンデー毎日、社会部で走り回り、生活家庭部や学芸部の部長、編集局次長など身に余る職を経験させていただいた。

現在は混沌とした日本のマス・メディアの中で、読者との信頼関係を再構築しようという毎日新聞のオンブズマン制度「開かれた新聞」委員会の活動をおして、新聞学科OBとして日本のジャーナリズムにささやかなりとモ

貢献したい。

もとアナウンサー？

友田哲郎(昭和44年卒)



ローカルのテレビ局勤務となると、必然的に報道も営業もという「なんでも屋」にならざるをえない。といって、私のような経歴の持ち主というのはどうやら全国的にも珍しい方らしい。

卒業後故郷の新設テレビ局にアナウンサーとして中途入社したが、その後本社・支社の営業現場を経験(大阪では一生懸命商売用大阪弁まで習った)し、その後またニュースキャスターに戻り、制作部ディレクター、報道部デスク、放送部などのベテランポジションの異動を経て、いまはシステム開発室という、要するにコンピュータシステムのお守りをしている。

同窓会創立40周年記念

原稿書きにパソコンを使っているからという理由で、いきなり汎用機とコボルというまるで畑違いの世界に放り込まれたのは七年前。その時はいささかアタマに來たものの、すぐにそれまでの経歴が役立つときが來た。「スボットCMの間引き問題」という、民放の存立に関わる不祥事が某局で起きた時多くのシステム担当者の中でほとんど私だけがその問題の複雑な背景について即座に説明し、対応策を提案できたからだ。

その後インターネット、イントラネットと守備範囲は広がり、特にホームページ製作などは取材・写真撮影・文章作成・レイアウトというプロセスを踏むので、むしろ自分には一番向いているのではないかと感じたくらいだ。また、もともとハードウェアの方も好きなのであってLANの敷設工事とか、機器の修理メンテナンスなど苦にならないので自分でやっているが、おかげで最近入社した技術部の若い連中など、どうやら私が文学部出身のもとアナウンサーだとは思っていないらしい。

システム担当者としては、これから地上波テレビデジタル化の荒波に正面からぶつかっていくことになるが、おかげでどうぶん勉強のタネは尽きず、この年でもいいアタマの運動をさせてもらえると思うことにしている。

最後に、地上波テレビがデジタル化

されることでどのような影響があるか。その大きさはBSデジタル化の比ではなく、単に今のアナログテレビが使えなくなるといようなレベルではない大きな社会問題となるだろうと思っている。新聞学科には、このテレビメディアにおける前例のない壮大な実験をきちんと見据え、体系的に検証してもらいたいものと思っている。

(テレビ大分システム開発室長)

残したものは何

山本明夫(昭和46年卒)



一号館講堂で行われた学部別の卒業式から三十年余り。お世話になった諸先生方も多くが鬼籍に入られた。先日、長年勤められた武市英雄教授の退職の集いに出席する機会があったが、会場ほとんどが一世代から二世代若い人たちで少々寂しさを感じた。が、反面で新聞学科としての伝統が脈々と受け継がれているのを目の当たりにして心強い思いをした。

私自身は職場や健康にも恵まれ、報道現場に居続けることで社会の変化を身をもって感じる事ができた。有り難いことである。現在は、六年前に番

組立ち上げに加わったNHK衛星放送第一の「BSニュース50」の制作に、おとしの夏から再び携わっているが、ハワイ沖の実習船事故や、小泉政権をめぐる様々な動き、米国での連続テロとアフガン攻撃など、休みなしの対応が続いている。

一方では、日経平均一万円割れや高い失業率に象徴される底のない経済崩壊状況の長期化によって、再建への道筋がなかなか見えなくなり老若男女を問わず日本人の「意欲」を削いでいる状況にもどかしさを覚える。

卒業後、函館に赴任して以来四島をすべてまわり現在の職場は十一カ所目。この間、事件事故をはじめ選挙報道まで「社会系」を中心に仕事にあたるきたが、とりわけ今年四月に新滑走路が供用され開業二十四年にしてようやく「片肺」状態を脱却する「成田」での三年間は印象に残っている。

ボタンの掛け違い(?)から地元農民に大きな負担をかけた空港設置だったが、十年前に一年余りにわたって開かれた「空港問題シンポジウム」をきっかけに、話し合いによる「開発と地元との共生」を模索する機運が住民と行政双方に生まれた。マスコミが旗を振ってどうこうする問題ではないのだが、地元で駐在する各社と共同歩調をとることで世論を喚起し、当事者同士のパイプ役を果たす事ができたのではな

いかと思っている。

新聞学科入学当時の志(ドキュメンタリーやドラマなどの制作)とは違った職場環境であったが、今「こんなものか」と妙に落ち着いている一方で、「これで良かったのか……?」の反省が残るのはまだ生きている証拠か。

まだまだ現役でゆくぞ!

NHK報道局(NHK情報ネットワーク番組制作部)

元気の女友達がパワーの源

明地 祐子(昭和56年卒)



二十二歳で大学を卒業し、今年四十四歳を迎える私達。夢見がちだった乙女達も、今や賞禄十分の主婦。妻、母だ。仕事の面では、勤続組は当然ながら大ベテランの域。別の仕事に転身組や、リタイア後カムバック組も数多い。

かく言う私は、「論文作法」で仙名紀先生に褒めていただいたことを心の支えに、「文章を書く仕事」を細々と続けてきた。子育てや親の看病に時間を取られ、ほとんど専業主婦だった時期にも、編集プロダクションを経営する夫が切羽詰まった仕事を土産に持ち帰

同窓会創立40周年記念

るお陰で、月に数日は否応なくワープロに向かった。私のような怠け者が書き続けて来られたのは、この環境に因るところが大きく、今となっては夫に感謝している。

求人、住宅、芸能、自動車など、さまざまなジャンルの雑誌の原稿書きや編集作業を経験し、それはそれで楽しかったが、「もっと、自分にしか書けないものを書きたい」との思いに駆られ、九八年、趣味で愛読していた講談社の女性漫画誌『BE・LOVE』の原画賞に応募。幸運にも初挑戦で入選、漫画化され翌年デビュー、漫画原作者の肩書を頂戴して四年めになる。

「書きたいものを書く」ことの楽しさと難しさを痛感している今この頃、恥じ入りたり落ち込んだりすることも多々あるが、友人達の「面白かった」「感動した」の声援に大いに励まされている。

さて、先日、久々に新聞学科のミニクラス会とでもいうべき食事会に出席たわいない話に笑い合い、沢山の元気をもらってきた。参加者は、首都圏在住の女性ばかり六名。当日出席の面々の近況を。

櫻原(菅家)ゆかり「昨年のオールフイアンズデー実行委員長の大任を果たし、ほっと一息。フリーアナウンサーとしても精力的に活動中。

西村(井澤)聖子「野田秀樹制作、大

竹しのぶ主演の舞台の裏方仕事で大忙し、二時間の遅刻に平謝り。

斎藤(太田)信恵「徳間書店の超ベテラン社員。『千と千尋の神隠し』のヌタッフルにも名前が。

平田(林)康代「結婚相談所の相談員という未知の職種に飛び込んだが、まさに天職という感じ。

和田(大島)尚子「愛情豊かな妻、母のイメージは不変、そろそろ子離れをの周囲の声に少々戸惑い気味？

幹事役こそ苦労さま!

(漫画原作者、明地事務所)

卒業年

椎名達人(昭和62年卒)



二〇〇一年一月半ば、私は妻かおる(学部時代の同窓生である)とともに、

同窓生の一人に会うため、フランクフルト空港に出かけた。大手多国籍企業に勤めるその同窓生は日本からの出張でEU内数か所を回った後の帰路途中、一時間余の乗り継ぎ時間に私たちははしはしの会話を楽しむことができた。

現在私は、勤務する研究所のフルタイム勤務所において、通信、放送郵便に関する情報の収集等に携わるため、妻とともに赴任中である。慣れない

い土地で様々な苦労はあるものの、一方で暮らしやすさも感じている。

例えば、フランクフルトには長時間の満員電車通勤が無く、居住空間にはゆとりがあるなど。またとかく評判の悪いドイツ料理も試してみれば必ずしもそんなことはなく、思いのほか豊かな食生活をエンジョイしている。

EU圏内は物資の流通が自在であるためか、八百屋の品揃えも驚くほど豊富だ。日本風の鍋料理をするには固すぎる野菜も西洋風煮込みにはびつたりで、やはり郷に入れば郷に従えである。

週末には妻とともに市場をめぐり、食材を買いこむ。休職中の料理本編集者である妻のイニシアチブのもと、料理はこちらの生活における楽しみのひとつだ。

学部卒業後、大学院に進学し、山本透先生、春原昭彦先生には大変お世話になった。現在の職場に就職後も、春原先生のゼミにオブザーバーとして参加させていただいたり、ドイツ赴任前の数年は、鈴木雄雅先生を代表とする院生・院生OBによる研究会への参加で、なにかとキャンパスを訪れることが多かった。

日本での職場は市谷でキャンパスまで徒歩二十分だったが、現在は時差が八時間もあるヨーロッパ。物理的距離は如何ともし難いが、そこはインターネットの時代。グローバル化と国際コ

ミュニケーション論をインターネット上でやりとりしあつたことを通して、前述の研究会は本年度も一定の成果を挙げつつある。

もっとも国際コミュニケーション論の討議は討議、実際問題として、大学の第二外国語がフランス語であった私のドイツ語能力はいまだ上達の兆しをみせず、現地採用の職員には、むしろ英語を習ってお帰りになったほうが、今後のためでは? などといわれる始末。グローバル化の時代、それもまた確かにそのとおりなどと、へんな日々これ好日をやってちゃあいけませんね。

(財)国際通信経済研究所 フランクフルト事務所長)

変わらない、変わった友たち

八巻 健(平成2年卒)

原稿依頼を受け、あらためて年月を数えてみれば、卒業して既に十二年が経っていた。気がつけば千支も一回り……。懐かしさもあり、参考にと思っ新開学科のホームページを見れば、

とあるゼミではパソコン必須、学生がそれぞれにホームページを立ち上げてきている。我々の頃とは随分と様変わりしている。卒業論文を手書きで執筆していた我々の時代が懐かしい……。

と、こんなことを書いて時代に取り

同窓会創立40周年記念

残された人間と思われても困るので、それについては否定させていただく一応。

幸か不幸か、印刷会社に籍を置きながら同窓会の本業である印刷の仕事に従事することもなく、入社以来、画像・映像メディアに関わる日々を送っている。イマ風の流行り言葉で言うところ「デジタルコンテンツ」と言えはいいだろうか。ともかく保守本流とはかけ離れた部門にいるおかげで、とりあえずは昨今の「ITブーム」にも乗り遅れることもなく過している。

さて、卒業十年の節目となる二〇〇〇年三月、平成二年卒業生の同窓会が行われた。あれから、既に二年も経ってしまったことに愕然。

それにしても、十年ぶりの再会だというのに、拍子抜けするほどに変わらない懐かしい顔が並んでいた。

「あれ、誰だっけ」などという、ドラマによくある光景を少しは期待(?)してもいたのだが、全くの期待はずれであった。そんな三文小説みたいな話、そんなふうあるわけではないようだ。しかし、変わっていない。などと思っているのは、当の本人たちだけなのかもしれない。懐かしいメインストリートに目を向ければ、そこには明らかに我々とは違う世代の学生たちの姿がある。

何より驚くのは、聖イグナチオ教会

の様変わりしてしまったこと。我々の在学中、四谷駅の正面にそびえ立っていた趣ある塔は、今はもうない。建物の老朽化など、さまざまな事情があったのだろうが、個人的には「建て替える必要があったのだろうか？」と首を捻る光景である。



時間が経つにつれ、さまざまなことが変わってしまうのは、時として寂しいことでもある。

我々も、いったいつまで変わらずにいられるものか。また顔を揃える時にも、皆の変わらない顔を目にすることができるだろうか？

(凸版印刷株式会社)

異質な環境のお陰

蔡 隆盛(昭和62年院後期修了)



キャンパスを離れて久しいが、上智大学の世界は日本ではないという認識と恩師に対する感謝の念が、卒業後年を経るにつれ、益々深まるように思うこの頃である。

各国から奉仕する神父様方の暖かい御指導のもとで、あたかも自分が連合国の中に身を置いているかのような雰囲気の中で勉学に励めたのは幸いであった。しかも学部学科の壁を超えて他学部、他学科、他ゼミに参加でき、多くの先生方と接する機会があり啓発向上的の薫陶を受けた。そのおかげで、新聞学科に在籍していた私は、在学中に上場企業の立石電気、山一證券での中国語講師の仕事に携わりながら、博士後期課程には、ハワイ州立大学の言語学部大学院の台湾語にも挑戦した。

米国から帰国後の一九八五年日本電気(NEC)で嘱託社員として二年間勤めながら博士後期課程を修了。八七年、正社員として、野村證券へ入社。インバーストメント・バンカーとして、国際金融の世界に入り十一年間勤めた

のち、四年前に台湾の中央銀行へ移った。現在母国のためにささやかなご恩返しをしていけるように努めている。

新聞学、言語学、ハイテク、国際金融、中央銀行のバンカーと私のたどった道はそれぞれ個性があるが、これらの学問、仕事をこなせてきたのもひとえに、新聞学のニュース・センスとニュース・ソースが私自身の中で生きていたからこそであると自負している。また更に台湾人としての「自由な発想」という三つ子の魂が働いているからであるとも思っている。

上智に在籍した学部、大学院の七年间に、尊敬すべき恩師、仲間として暖かく迎えてくれた友人たち(寮生、クラスメイト)の助けによって、私の二十代は実に楽しく充実していた。特に人生の曲がり角や、勉学上自分自身の問題を抱えていた時など、昨年他界された敬愛する小糸忠吾先生からは、いつも最適なアドバイスを頂いていた。

他学部であるが、英語学科教授のニッセル神父様は「有教無類」の異文化コミュニケーションの重要性を徹底的に生徒に教え込まれた。あの教えは今でもとても印象深く、積極的に職場で応用している。今年、一月十七日の武市先生の上智での最終講義に参加できなかったが、昨年十二月二十五日付け『週刊エコノミスト』上での「米国では二十年前に夕刊は役割を終えた」を

同窓会創立40周年記念

台湾で拝読し、先生の精力的な出筆と、なお新たな大学に全力投球する開拓精神に、敬服している。

今後とも上智のOBとして、できるだけ、上智の奉仕精神を身をもって実践していきたいと思う。

私も人生の折り返し地点に来たが、大自然の法則のようにギブアンドテイクという基本的なスタンスを忘れず、コミュニケーションを通じて人間として価値ある人生を送るため、ここ台湾で、上智で培った精神を活かしながら発信を続けていきたい。

(台湾中央銀行行務委員)

大学院の思い出

李 虎栄(平成10年院後期修了)

成田空港
でみんなに
帰国のあい
さつをした
のがまだ記
憶に新しい。



もう上智を離れて四年目になる。私と上智大学との縁が始まったのはもう十二年の前のことである。一九九〇年四月、大学院新聞学専攻の研究生として入り、二年間の研究課程をへて、修士課程二年、それから博士課程に入って四年間の生活をおくった。そして九八年三月みな様のおかげで博士号を取るこ

とができ、現在は韓国ソウルにある

京畿大学でマスコミ関係を教えている。振り返ってみると、何にも知らず片言の日本語しかできないまま、上智へ入って先生方をはじめ、まわりの人々に迷惑をかけたばなしの毎日であったが、本当にまわりの助けがなかったら、いまの私は存在しなかったと思う。上智のことを思い出すと、みんなの顔が浮かんでくる。研究生時代日本の生活にまだなれていなかったとき、正しい日本語でゆっくり接してくれた猪谷朋代さん(院前期平成4年修了、NHK)、大学院の受験準備で日本語のレポートを書くたびに、その文章をいちいちチェックしてくれた小黒純さん(院前期平成4年修了、共同通信社)、また大学院の入試に一回落ちたとき、私を癒すために江ノ島旅行を企画してくれた小林直子さん(平成3年卒)と高瀬宗人さん(平成4年卒)、それから博士課程が終わるまで春原研究会に積極的に参加してくれた椎名達人さんと原田繁さん(平成10年院後期修了)など、多くの人にお世話になったと思う。

九二年四月、大学院の修士課程に入ってからはいよいよ先生方に恵まれ、勉強のことだけでなく人生のいろんな事を教えてもらい、研究者としての道を歩ききつかけとなった。とくに九年間の日本留学生活の指導教授である春原昭彦先生のごことは一生忘れることはでき

ないであろう。

大学院入試に落ちたとき、サバティカルであったにもかかわらず、試験直前にアメリカから送ってくれた「初志一貫」という短い励ましの葉書をもらったり、また先生の研究に対する真摯な態度と情熱、学生と接するときの厳しさと温かさなどに感服した。現在教員の道を歩む私のお手本になっていることは言うまでもない。

特に先生のジャーナリズム史の授業を通して私は、歴史を勉強することが単なる過去のことを振り返るだけの意味ではなく、現在を知った上で、未来のことに目を育つという貴重な知識を得た。

武市英雄先生のごことも忘れられない。先生との思い出は主に夜十時を前後にしていたが、それはその時間がちょうど研究室の退室時間であったからである。研究室を出ると、キャンパス七号館四階の一番左にある先生の部屋はいつも電気がついていて、たまに研究室によると、先生は授業中にはあまり聞くことのできない日本メディアの裏事情や多様な先生の知人の話などを温かく話してくれた記憶がある。

また先生の独特な名刺の整理方や重要な新聞記事のスクラップなどがたいへん印象深かった。いつのまにか私の研究室にもそのようなものが置いてあることに気づくと、また先生に感謝の

気持ち浮かんでくる。

もう一人、現在の私に多くの影響を与えてくれたのは石川旺先生である。先生は私が持っていた狭い日本人観をより広くしてくれた人でもあるが、何よりも私の中に潜在していた平凡な部分を私の長所として引張ってくれた先生でもある。また先生はいつも問題を提起し、学生に全ての物事に対して問題意識を持つように強調し、そのような訓練を通じて研究することにおいて自らその目的を探せるような力を植えてくれたと思う。また先生は、韓国や中国からの留学生の名前をその国の発音でいちいちおぼえ、先生の方から先に流暢な発音で名前を呼ばれた時の感動は今もおぼえている。また先生のお宅で開いてくれた私の結婚祝いパーティーは留学生生活のなかで一番忘れられない思い出である。また大学院合宿の後、先生のお宅で主催してくれたパーベキュー・パーティーの味もいまだに覚えている。

最後に、私が博士論文を書き終わる段階で鈴木雄雅先生からもらった印象はやはり強かった。自分で何回もチェックをし、完璧なつもりでも、細かいコンマ一つひとつの間違いまでも指摘してくれる時、研究をするに際して幅広い問題意識だけでなく緻密さと繊細な姿勢も兼備しなければならぬということを見習った。また先生はい

同窓会創立40周年記念

つも学生たちの面倒見が良く、今も私のゼミ合宿で日本へ行くと、見学先の手続きや上智での講演などの準備をしてくれるなど、頭が下がる。

まだまだ私の上智の生活を思い出すと感謝の言葉を伝えたい人はたくさんいる。私の約十年間の留学は上智での生活がすべてと言っても過言ではない。多くのことを習い、感じ、成長する重要な時期であった。

いまから考えてみると、その時期のすべてを支えてくれたのはやはり新聞学科のみさんであったと思う。特に四人の先生は現在の私を作ってくれた恩人である。

先生や上智の人々から受けた知識や愛情をいまの私の学生たちに絶えず伝えることが、先生と上智大学新聞学科への恩返しであると思って、今日もがんばるぞ。

(韓国京畿大学多重媒体映像学部助教 授)

しょうそく

12年#石橋良 新聞科第一回卒業でもう同級生もおりません。明治四十四年生まれで、九十歳ともなると物忘れがひどくてこまっております。過ぎた人生を思い出すと夢のようです。毎日の新聞を見ているのが楽しみです。皆様のご健康を祈ります

23年#早川正一(オペラサロン・ト

ナカイ・オーナー)若手アーティストの育成とオペラの普及のため、十年間で二千五百回のオペラ公演を達成しました。欧米では文化支援の税制が整っているため、市民の三分の一が寄付をして伝統文化を支えています。日本も平成13年税制改正で、NPO税制が遅ればせながら実現しましたので、認定NPO法人に組織替えを計画しています。宗教音楽劇から発達したオペラを守るため、余生を捧げるつもりです <http://www.operacorp>

森可昭 同窓会会報の合本をお送りいただきありがとうございます。またとない素晴らしい思い出集です。直接担当された鈴木雅雄先生はじめ、いろいろご多用な方々だけに、まとめるのにはご苦労が多かったものと存じます

28年#栗田昭平 一丁評論のほかに何かと思ひ、このほど「伊豆箱根沿線のぶらり歴史の旅」なるホームページをオープンしました。ご興味ある方は、<http://www.2tokaori.jp/nut/>をのぞいてみて下さい。パート1「葦山から長岡まで」は、源氏再興・北條一族の遺跡の宝庫です。七十二歳の生き甲斐の一つとして今後書き足していくつもりです

29年#伊東敬一 最近のマスコミは地に堕ちた。「靖国」「歴史教科書」は、国民自らが考えるべき問題である。中

国、韓国が、イチヤモンをつけるのは明らか。「内政干渉」。両国の恫喝外交の口車によって、反対を強要しているマスコミは、どこの国のマスコミか。此後この国の精神的不幸は消えない。独立国家「日本」に未来あるか

32年#伊藤進(芸名・中村又蔵) NHK金ドラ「からくり犯科帖」01年9月21日より放送、製作指導担当。10月2日、26日歌舞伎座に出演予定。11月2日、25日迄、ロンドン、エディンバラ市内の高校全約百名に「歌舞伎風口ミオとジュリエット」の指導をする。昨年五月に続いて二回目。後援は大和ファンデーション、国際交流基金

38年#西村一成 この夏から現役を退き、新聞博物館長に就任しました。編集・製作・事務・営業とほぼ一通り経験しましたので、満足しています。わが国初の新聞博物館として十四年前に設立、主に言論史研究と古い機械の展示が中心で、今さらながら戦後新聞を取り巻く環境が激変していることを実感しています

44年#筒井厚生 私の、カラオケ道場は、ふる場です。「君と出会った香林坊の、酒場に赤い灯がともる、ああ金沢は、金沢は」と、北島三郎さんの加賀の女、から始まります。それから、石原裕次郎さんと浅岡ルリ子さんの「夕陽の丘」「長崎の鐘」「東京音頭」や英語のカラオケもあります。「エーデル

バイス」、最近では、ベサメムーチヨまで。指揮もしました

H3年#鈴木高志(杉並区立中央図書館) 図書館司書になってはや四年。利用者への資料提供を最優先に考えつつも、昨今の出版不況の状態を見ると腕組みしてしまう日々が続きます



H6年#小田(井上)葉子 三年前松田に結婚し姓が変わりました。広告デザインの方面に進み、グラフィック・Webデザインの仕事をしておりますが、八月から産経新聞の千葉紙面の広告を作成する会社に転職し頑張っております

H13年#大橋亜希(NHK) 五月にNHK函館放送局に赴任しました



同窓会創立40周年記念

二〇〇一(平成13)年度卒業生進路一覧

浅倉彩(バリエー・クリック・ジャパン)、阿藤泉(デルフィス)、馬場信嘉(留学)、福田浩章、原弘子(猪瀬直樹事務所)、橋本みづ子(NHK)、橋本喜哉(コナグループ)、早川茉紗子(日立製作所)、平光寿規(日本IBM)、保坂祐之(日経リサーチ)、飯ヶ谷航太(Link Consulting Associates)、生駒典子(スガツネ工業)、磯田健一郎(FIex、番組制作)、上村麗花(ソウル大学院進学)、金子容子(キャリアプラザ)、木川未欧(ベストプロジェクト、PR)、桐石一起(テレビ東京)、小玉智之(トヨタファイナンス)、小泉光哉(AT&Tグローバルサービス)、小松崎歩(MCMATE)、小西真理(Tiss)、河野陽子、工藤寿子(AEON)、工藤恵(共同通信社)、薫田智子(豊通テレコム)、松田直子(医学書院)、松尾仁(東北新社)、宮野和美(HIS)、村上ともこ(愛媛新聞社)、室園崇与(AIU)、内藤陽子(留学)、荻野史暁、岡晶子(T&Oコンサルティング)、大石健(日本テレビテレビエンタープライズ)、大塚淳也(東北新社)、今村百合映(留学)、三枝アキ(ぎょうせい)、斉藤えり子(インテリジェンス)、斉藤カズ、関麻里子(読売インフォメーションサービス)、柴野理奈子、重保咲、清水麻佳(ニイウス)、下平綾(ヤクルト本社)、白櫻伸也、杉田裕美(進学)、砂川洋子(ぎょうせい)、田尻慶次郎(大成建設)、高野淳一(有線ブロードネットワーク)、高野健太郎(東宝)、田村典子(富士ソフトABC)、種蔵里美(日立柏レイソル)、遠山圭介(東海テレビ)、遠山美樹(イー・アクセス)、内山涼子(MRS、広告調査)、上田美央(ゴールドマンサックス)、和田ひとみ(講談社)、山本集也(弘済出版)、山下康幸(東京スポーツ)、横山達史(富士通)、米沢弘美(日本短波放送)、吉田竜童(NTTデータクリエーション)、由野まどか(NEC)、吉崎孝一(毎日新聞社)、田中美里(川田悦子事務所)、大石祐輝、押尾勇也(講談社)、吉田伸太郎、安徳美妙(キーコーピー)、郡司音(電通)、因幡彩子、蔭山麻由子(講談社)、加藤敏洋(東京海上火災)、岡澤理恵(クレオ)、里崎尚子(長崎新聞社)、田村真義(宝島社)、矢口亨(報知新聞社)、山崎元昭(フシントンホテルグループ)

以上 78名(男32名、女46名)

大学院博士前期課程修了者
二〇〇一年「朴秦甫、遠藤秀一郎、傳儀、平野亜矢、板橋朋子、岡井崇之、末永雅美、金錫遠 以上8名
二〇〇二年「賈義、横内一美、申美

淑(以上進学)、黄美貞、董玲玲、宮麗穎、宮所可奈、金賢卿 以上8名

新規運営会員加入者(二〇〇一年四月二〇〇二年三月) 26名 敬称略

36年「古木勉 38年「原直樹 61年「謝孝浩(フリーランス) H3年「鈴木高志 H4年「橋本嘉代 H5年「宮本修(光文社)、山本僚子、今田真実(ソニー) H6年「神田幸樹枝、宮澤正・香織、渡邊ゆか H7年「神原史子 H8年「内山澄子 H9年「花尾信一郎 H10年「柴田隆史 H11年「朝倉和、芦部真知子 H12年「青山哲(アサツキー・テイ・ケイ)、坂口朗山下武朗(NHK釧路)、原典子、木村なつき H13年「赤池洋文(フジテレビ)、島中千鶴(大学院在)、大橋亜希

新刊紹介

磯浦康二(32年)『話す技術・聞かせる技術』
清水義次(36年)『英単語・社会人ならこれが常識』
今成勝彦(45年)『首相公選は日本を変えるか?アメリカ議会のダイナミズムに学ぶ』(以上三冊は三笠書房刊・知的生き方文庫刊)
佐藤八重子(50年)『はじめて受けるTOEIC TEST直前準備テスト』(共著 桐原書店) 著者の一言「かなり噛み砕いて説明してありますので、基礎力を

もう少し固めた人や、初めてテストを受けてみる人には良いと思います。

鈴木雄雅(50年)『大学生の常識』(新潮社、一〇〇〇円)文学部S教授が限りなく大学と



大学生を描いたエッセイ。舞台は上智大学が

岩野裕一(62年)『日本のピアノ100年』(共著、草思社、一九〇〇円)
田島泰彦教授「人権が表現の自由か」(日本評論社、一三〇〇円)
田島泰彦教授・原寿雄(編)『報道の自由と人権救済』《メディアと市民・評議会》をめざして(明石書店、三八〇〇円) いずれも二〇〇一年発行

マスコミ・ソフィア会から
『リアルタイムで国際ニュースがわかる本』 マスコミ関係に職をもつ上智大学卒業生がつくるマスコミ・ソフィア会(濱口浩三会長「昭19年新聞科卒)が読みやすく、わかりやすく国際問題を解説します。四月中旬発行予定。

「結婚おめでとうございます
高松(高野)佳代子さん(昭63年)
宇津拓郎さん(H6年)
清田(堀)悦子さん(H8年)
池内(村田)いずみさん(H8年)
小澤龍太さん(H10年)
井手(鈴木)香織さん(H10年)

同窓会創立40周年記念

論文博士号授与

二〇〇一年度の学位授与式が行われた3月26日、鈴木雄雅教授(50年・院57年)に新聞学科出身者としては第一号となる、博士号(新聞学)が授与された。新聞学専攻では九人目(課程博士六、論文博士三)の博士号授与者。提出論文題目は「植民地ジャーナリズムの生成過程 十九世紀のオーストラリア植民地」。また箕輪成男・神奈川大学名誉教授に新聞学専攻から博士(新聞学)の学位が授与された。提出論文題目は「出版学序説」(日本エディタースクール刊)。

図書類の寄贈

左記の卒業生からジャーナリズム・マス・メディア関係の本が寄贈されました。ありがとうございました。図書館4階新聞学研究室に配架されています。川合健一様(昭59年院前期) 大野彩様(H2年卒) 中村藍様(H11年卒) 異動

長谷川倫子(51年学部、61年院後期) 東京経済大学「コミュニケーション学部 野村六三(58年) 北海道新聞東京支社社会部 松浦優紀(63年) 講談社別冊編集部 原田悟(H3年) 中日新聞東京本社政治部 小川雪(H6年) 朝日新聞学芸部 伊藤裕香子(H7年) 朝日新聞be編集部 糸井洋司(H12年) NHK福島放送局 宣聖芳(H

2年院前期) 台湾電視東京特派員 金大煥(H6年院後期) 慶州大学放送言論公告学部専任講師 別府三奈子(H13年院後期) 大分県立芸術文化短期大学

ご冥福をお祈りします

長い間新聞学科二年生の英語を担当し



てくださったシスター・メリ・ナガンマ先生が一月九日 ニューヨークにて逝去されました。

ご存知ですか

思わぬところで卒業生が

何と云っても大西健丞氏(H3年、ピースウィンズ・ジャパン代表)だろう。お上の言うことはあまり信用しない(ひつ)。朝日(1月18日)で、NGO、外務省から田中元外相、鈴木宗男議員、小泉総理などを巻き込んだ事態に発展。国際化のなかで新しい風を吹き込んでいます。土井誠氏(昭41年)は読売新聞社から、原新監督率いる読売巨人軍球団代表に。ことしの巨人、ペナント奪回に向けてがんばって欲しい。武市英雄教授を囲む会で一席披露してくれた児山智明氏(昭61年)は何と真打ちの落語家入船亭扇治さん。師匠と一緒に旅をしたこともあるという神

津友好氏(昭22年)は江戸家猫八さんの追悼記事『朝日』01年12月12日(夕刊)で変わらぬ健筆が目にとまった。もちろんこの分野では毎日新聞の野島孝一氏(昭39年)が第一人者だろう。

ところで、毎日新聞は創立百三十年を記念してこの二月、社史『毎日の3世紀 新聞が見つめた激流130年』を出版したが、社史編集室委員として青野不緒氏(昭43年)がその編集に関わっている。同氏は四月から古巣の『サンデー毎日』編集部に戻る。

三月に終了した異色作「木更津キャッツアイ」(TBS)のプロデューサーが磯山晶さん(H2年)。前回演出「池袋ウエストゲート」もヒットした。漫画家小泉すみのの別名をもち、「みんなが同じようであっていいと思う」と、玄人受けするドラマ作りを目指す。

会報38号でも紹介した講談社ノンフィクション賞受賞の中村智志氏(昭62年、朝日新聞社)は第二作『ホームレスの歌 新宿「放浪歌人」七〇余年』(朝日新聞社、二〇〇二年)を発表した。昨年卒業した川村元気氏(H13年)制作の「RETSOP BOY」が第23回神奈川県映像コンクール(大島渚審査委員長)に入選した報が届いた。脚本・監督が川村、出演者に郡司青、田村真義さんら新聞学科同窓生が名を連ねる。<http://www.geocities.co.jp/Hollywood-Miyuki/1147/namik.htm> 参照

編集後記

今会報四十七号は「同窓会創立四十周年記念」の特集号になりました。通常ですと六頁建てですが、今回は紙面を倍増し、特集号らしい会報にしようとしたわけです。おかげで、幅広い分野で活躍されている卒業生から、中味の濃い原稿が届きました。

今号でも一つ特集されているのが武市英雄教授の退任でした。先生が上智に移られた昭和四十五年以降の新聞学科卒業生は、何らかの形でご恩を受けてきたと聞いています。改めてお礼申しあげます。(宮)

新聞学科同窓会「吉火会」のお知らせ

場所=ソフィアズ・クラブ 会議室
☎03-3238-3075(直通)
時間=午後6時~8時
飲食代=会費制 2,000円~3,000円 持ち込み大歓迎
記帳=記名ノートあり。署名だけでなく、感想、近況など、何でもどうぞ。
開催日=(原則毎月第一火曜日)4月2日、5月7日、6月4日、7月2日、8月6日、9月3日